

神経眼科 第4版 臨床のために

江本 博文, 清澤 源弘, 藤野 貞 著

臨床神経眼科は神経科学と眼科学が統合された独立分野で、その萌芽は20世紀初頭の米国にあった。1947年 Frank B Walsh (1895~1978) の『Clinical Neuro-ophthalmology』が上梓されるに及び、神経眼科学は広く認知された。やがてこの国は、W.F. Hoyt (1926~2019), J. Lawton Smith (1929~2011) らその道の泰斗を輩出し、神経眼科学は黄金時代を迎えた。

この時代にマイアミ大に留学した日本人医師がいた。藤野貞^{ただし} (1922~2005)、本書の初版版の著者である。長崎大助教授を辞して、この新領域を学びに渡米したのである。そこでは臨床だけでなく、視交叉血管の研究にも打ち込んだ。そして、この新領域の臨床医学をひっさげて67年に帰国すると、東京、東京医科歯科、慶應義塾、北里、大分医科などの大学や都立病院で神経眼科臨床を実践し、85年には今も続く夏の勉強会を立ち上げた。日本の弱点とされる臨床実践教育のため、彼はいずれの常勤職にもならず全国を奔走した。

その集大成『神経眼科—臨床のために』(医学書院)は1991年10月に誕生した。当時、眼科、神経内科、脳外科の医師たちは神経眼科という名称は側聞していても、どこか近寄りがたい難しい分野だと遠ざけがちだった。ただ、実臨床をしていると、この領域にかかわる症例にいやでも遭遇するから学習しやすいテキストブックを誰もが渴望していた。

藤野の教科書は、他の神経科学の教科書で多用される画像診断、電気生理学的診断の図は一つもなく、代わりに著者自らが描いた解剖図、イラストがふんだんに使われた。また、近代装備を使わなくても十分高度

な診療が可能だと「ポケットに入る神経眼科用検査用具」が紹介され、一部は付録としてつけられた。各項の記述は簡潔で、かつ引用文献は読者の学びやすさを考えた代表的和文論文が中心だった。時代的欲求と親しみやすさから、この出版は大反響を呼び5刷もの増刷を重ねた。2001年には第2版が出版され、これも6刷の爆発的売れ行きだったが、この間に藤野氏は惜しくも逝去された。

東京医科歯科大で藤野から実践教育を受けた江本博文、清澤源弘の2人の神経眼科医が、遺志を継いで第3版を執筆、2011年に出版。それから10年余、新知識は積み重なる。そして今回2023年4月、待望の第4版が完成。初版からみてページ数は倍加しているものの、初学者もベテラン医師もひとときとなる簡明さは確実に受け継がれている。

第3版までは記述がないか少なかったCRION, visual snow 症候群、脳脊髄液減少症、抗NMDA受容体脳炎、CLIPPERS 症候群などにも、しっかり新知識が盛り込まれ、欧文索引もついた。最近日本神経眼科学会から新診療ガイドラインが出た「眼瞼痙攣」についてもページ数を割いて詳述されている。

総じて完成度の高い、かつ非常に親しみやすい教科書となっており、たちまち増刷の声が聞かれそうである。

医療法人社団済安堂井上眼科病院名誉院長
若倉 雅登

B5・頁504 2023年04月
定価：11,000円(本体10,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05116-3] 医学書院刊